

# ヤマト政権の体制と仏教

ヤマト政権の体制は、5世紀後半から大きく変化した。横並びのクニの連合は、大和地方（奈良）のクニの首長（大王）を頂点に支配・被支配の関係をもつ組織になり、また、その政務は有力な豪族（地方のクニの首長）が執るようになった。政務を担う物部氏・蘇我氏の二強が勢力を争う中、仏教が公伝し、その対立は激化した。

## ○ヤマト政権の体制

### ●大王の支配体制（5世紀後半、雄略天皇の代～）

5世紀頃よりヤマト政権の首長（＝大和<sup>やまと</sup>地方のクニの首長）は、  
 (1) \_\_\_\_\_ と呼ばれた。

→ヤマト政権は連合であり、(1) と各地のクニの首長（豪族）の間に、  
 支配・被支配の関係はそれほどなかった。  
 ⇒5世紀後半～6世紀、(1) は氏姓制度をつくり上げ、  
 (1) が頂点となった支配体制を確立していった。

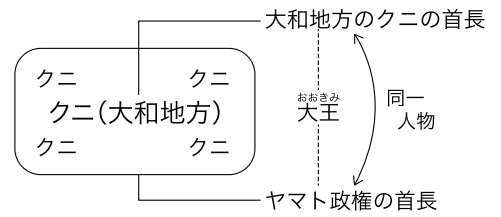


図1 大王の立ち位置

### <氏（ウジ）>

豪族を血縁関係ごとに<sup>(2)</sup> \_\_\_\_\_ と呼ばれる集団に編成した。

→例えば、蘇我<sup>そが</sup>氏・大伴<sup>おおとも</sup>氏・物部<sup>ものべ</sup>氏・筑紫<sup>つくし</sup>氏・東漢<sup>やまとのあや</sup>氏などである。

⇒氏を与えてやった大王は、与えてもらえた豪族より地位が高くなる。

◇氏の命名は職・地名に由来／氏の代表者を<sup>うじのかみ</sup>氏上と呼称

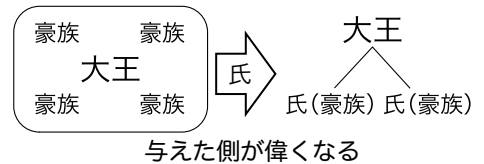


図2 氏による支配関係

### <姓（カバネ）>

氏ごとの性格・勢力に応じて<sup>(3)</sup> \_\_\_\_\_ を与え、氏を序列化した。

⇒姓には、例えば<sup>(4)</sup> \_\_\_\_\_ などがあつた。



氏姓の組合せは、例えば蘇我臣、大伴連・物部連、筑紫君などであった。

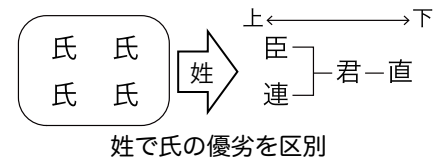


図3 姓による序列化

### ●ヤマト政権の政治体制（6世紀初め～）

#### <中央>

臣・連の姓をもつ氏から<sup>(5)</sup> \_\_\_\_\_ が選ばれて、

ヤマト政権の中央の政務を担当した。

⇒(5) の下に<sup>(6)</sup> \_\_\_\_\_ を置き、伴<sup>とも</sup>や部<sup>べ</sup>（総称：品部）を統率させて、

軍事・財政・祭祀などを分担させた。

◇伴…一般役人のような職

◇大王の一族に直属して奉仕する人々を<sup>(7)</sup> \_\_\_\_\_ と呼称

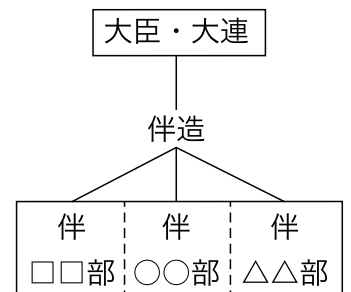


図4 中央の組織

#### <地方>

現地の豪族を<sup>(8)</sup> \_\_\_\_\_ に任じ、クニの支配権を保障する代わりに

ヤマト政権への奉仕を求めた。

◇豪族は私有民<sup>(9)</sup> \_\_\_\_\_ を、支配拠点の田地<sup>(10)</sup> \_\_\_\_\_ の耕作に使役

◇氏の家々に奴隷として奉仕する人々を<sup>(11)</sup> \_\_\_\_\_ と呼称

◇(8) の下には<sup>(12)</sup> \_\_\_\_\_ が置かれ、小範囲を支配

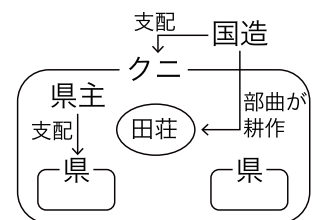


図5 地方の組織

# ○ヤマト政権の国際関係

## ●対外関係の緊張（6世紀前半、継体天皇の代）

6世紀初め、百済が加耶諸国に進出して、ヤマト政権の影響力が後退した。

↓ 507年、大伴金村ら継体天皇を擁立

百済が加耶諸国の一部を獲得した。

⇒大連大伴金村は百済との友好関係を考え、軍を派遣せずに黙認した。

⇒新羅も加耶諸国に進出し、ヤマト政権の影響力はさらに後退した。

⇒新羅に対しては、ヤマト政権は軍の派遣を決意した。

◇黙認の見返りか、百済が五経博士を遣わし、儒教が伝来



527年、<sup>(13)</sup> \_\_\_\_\_

…筑紫国造<sup>(14)</sup> \_\_\_\_\_ が朝鮮半島の<sup>(15)</sup> \_\_\_\_\_ と結び、

軍の派遣の途上、海路を断った反乱

…国造任命は一方的なクニの境界画定を伴うため、磐井はこれに反発か

⇒大連物部麁鹿火に鎮圧された。

◇筑紫…現在の福岡県、7世紀末までに筑前・筑後に分割

◇(14) …福岡県岩戸山古墳を磐井が生前に造らせた墓とする伝承あり



磐井など反乱者の支配地は接収され、ヤマト政権の直轄地<sup>(16)</sup> \_\_\_\_\_ にされた。



図6 大伴金村



図7 物部麁鹿火

## ●仏教公伝（6世紀中頃、欽明天皇の代）

6世紀中頃、百済・新羅による加耶諸国の分割が著しく進み、

大連<sup>(17)</sup> \_\_\_\_\_ は一連の責任を糾弾されて失脚した。

⇒大連物部尾輿と、渡来人と結んで台頭した大臣<sup>(18)</sup> \_\_\_\_\_ が、

中央の政務を担当する二強になった。

◇加耶諸国は562年に滅亡

◇蘇我氏は財を収める三蔵（<sup>みつくら</sup> 斎蔵・<sup>いみくら</sup> 内蔵・<sup>うちつくら</sup> 大蔵）も管理



538 (552) 年、<sup>(19)</sup> \_\_\_\_\_ が百済の<sup>(20)</sup> \_\_\_\_\_ ( \_\_\_\_\_ ) によって公伝した。

⇒大王<sup>(21)</sup> \_\_\_\_\_ 天皇は、大臣・大連に(19)を受容するかどうか意見させた。



稲目は(19)の個人的な信仰を大王から許されたが、尾輿・稲目の対立は激化した。

⇒対立は尾輿の子<sup>(22)</sup> \_\_\_\_\_ と稲目の子<sup>(23)</sup> \_\_\_\_\_ の間でも継続した。

